

8章 構造関連工事(改修標仕によること。)					8.2.4 あと施工アンカー					8.2.9 高力ボルト					8.3.8 【(b)置換】 ガス圧接【付加】										
1節 一般事項					1)金属系アンカー イ.アンカー本体の径、有効埋込み長さ、引張耐力、せん断耐力及び使用箇所					a.高力ボルト *トルシア形高力ボルト(JIS II 09) 2種(S10T) ・JIS形高力ボルト(JIS B 1186) 2種(F10T)トルク係数による数値 A ・溶接垂鉛めっき高力ボルト 1種(F8T)トルク係数による数値 A ・防錆処理高力ボルト 2種(F10T)トルク係数による数値 A					a.技能資格者: JIS Z 3881による(*2種以上) の有資格者 ・行わない ◎行う										
8.1.1 【付加】 適用範囲 a.本項の適用は、意匠証記仕様書に準じる。 b.改修標仕8章に示す工事のほか、耐震改修以外の構造改修工事においても、本章を適用する。					b.高力ボルトの径 *設計図による					b.技能資格者の技量検定確認試験 ・行わない ◎行う					c.技量検定確認試験の試験項目は、次による。										
8.1.3 コンクリートの種類 8.1.4 コンクリートの品質 8.2.6 構造体用モルタルの調合 8.2.5 コンクリートの材料及び調合 8.8.3 コンクリートの強度試験の結果 8.6.1 一般事項					a.コンクリートの種類 * I 類 b.コンクリートの種類 番号 コンクリート 設計基準強度 Fc (N/mm²) 施工用材種別 (cm) 単位水量の上限値 (kg/m³) 使用箇所 備考					8.2.10 溶接材料 [付加] [付加]					a.改修標仕8.2.10(a)(b)以外の溶接材料 b.新旧コンクリートの一体化、ひび割れ補修に用いるエポキシ樹脂は、引張強度が8N/mm²以上で、圧縮部のひび割れ幅及びその方向を考慮して、適切な粘度を有する材料とする。 c.スタッドの呼び名、呼び長さ *設計図による					備考 試験片及び試験方法は、次による。 引張及び曲げ試験 各5本 試験片はJIS Z 3881に示す削り仕様(I,1D) 試験体積(D 25) 材種(SD345)					
8.1.3 コンクリートの種類 8.1.4 コンクリートの品質 8.2.6 構造体用モルタルの調合 8.2.5 コンクリートの材料及び調合 8.8.3 コンクリートの強度試験の結果 8.6.1 一般事項					ロ.セットの方式 (* 本体打込み式改良型) ハ.接着剤の種類、径、長さ *設計図による					8.2.11 柱底均しモルタル及びグラウト材 [付加]					a.柱底均しモルタル *無収縮モルタル b.新旧コンクリートの一体化、ひび割れ補修に用いるエポキシ樹脂は、引張強度が8N/mm²以上で、圧縮部のひび割れ幅及びその方向を考慮して、適切な粘度を有する材料とする。 c.グラウト材の呼び名、呼び長さ *設計図による					試験片及び試験方法は、次による。 引張及び曲げ試験 各5本 試験片はJIS Z 3881に示す削り仕様(I,1D) 試験体積(D 25) 材種(SD345)					
8.1.3 コンクリートの種類 8.1.4 コンクリートの品質 8.2.6 構造体用モルタルの調合 8.2.5 コンクリートの材料及び調合 8.8.3 コンクリートの強度試験の結果 8.6.1 一般事項					1)コンクリート番号(1)については構造体強度補正を行う。 場所打ちコンクリート杭の構造体強度補正(S)の値は改修標仕8.2.14による。 2)コンクリート番号(1)については、試し練りを行う。 3)コンクリート番号(1)については、調査管理強度の管理試験を行う。 4)コンクリート番号(1)については、構造体コンクリート強度の推定試験を行う。 5)コンクリート番号(1)については、建築基準法第37条ニ号に規定する国土交通大臣の認定を受けたコンクリートとする。 6)コンクリート番号(1)については、次に示す材料試験を行う。						8.2.12 調査の材料試験等 [付加]					a.鋼材の材料試験 *行わない ・行う(対象鋼材: 1)試験要領は、改修標仕8.2.13(a)による。 b.板厚方向に引張力を受ける鋼板の試験 *行わない ・行う(対象鋼材: 1)材料試験を行わない場合でも、高力ボルトの又-R管埋込を提出する。 2)材料試験を行う場合は、JIS形高力ボルトはJIS B 1186、トルシア形高力ボルトはJSS II 09に述べる試験法に基づいて試験を行う。抜取り数は、監理者の協議による。 d.トルシア形高力ボルト(F14T)は、構造図に示す「トルシア形超高力ボルト試験要領」により、試験を行う。					備考 試験片及び試験方法は、次による。 引張及び曲げ試験 各5本 試験片はJIS Z 3881に示す削り仕様(I,1D) 試験体積(D 25) 材種(SD345)				
8.1.3 コンクリートの種類 8.1.4 コンクリートの品質 8.2.6 構造体用モルタルの調合 8.2.5 コンクリートの材料及び調合 8.8.3 コンクリートの強度試験の結果 8.6.1 一般事項					コ.アンカーハーの径、有効埋込み長さ、引張耐力、せん断耐力及び使用箇所					8.2.13 調査の材料試験等 [付加]					a.鋼材の材料試験 *行わない ・行う(対象鋼材: 1)試験要領は、改修標仕8.2.13(a)による。 b.板厚方向に引張力を受ける鋼板の試験 *行わない ・行う(対象鋼材: 1)材料試験を行わない場合でも、高力ボルトの又-R管埋込を提出する。 2)材料試験を行う場合は、JIS形高力ボルトはJIS B 1186、トルシア形高力ボルトはJSS II 09に述べる試験法に基づいて試験を行う。抜取り数は、監理者の協議による。 d.トルシア形高力ボルト(F14T)は、構造図に示す「トルシア形超高力ボルト試験要領」により、試験を行う。					試験片及び試験方法は、次による。 引張及び曲げ試験 各5本 試験片はJIS Z 3881に示す削り仕様(I,1D) 試験体積(D 25) 材種(SD345)					
8.1.3 コンクリートの種類 8.1.4 コンクリートの品質 8.2.6 構造体用モルタルの調合 8.2.5 コンクリートの材料及び調合 8.8.3 コンクリートの強度試験の結果 8.6.1 一般事項					ロ.アンカーハーの種類 *カバセル型回転-打撃式(*無機系・有機系) ハ.アンカーハーの新設箇内への定着長さ ・頭部ナット付きの場合はアンカーハー径の20倍以上、頭部ナットなしの場合はアンカーハー径の30倍以上 ・設計図による					8.2.14 鉄筋の加工及び組立 a.継手の工法 部位等 継手工法と適用範囲					a.継手の工法 部位等 継手工法と適用範囲 b.板厚及び定着長さ 柱主筋 *重ね継手() *ガス圧接() ・機械式継手() *溶接継手() 梁主筋 *重ね継手() *ガス圧接(D19~D25) ・機械式継手() *溶接継手() スラブ、壁筋 *重ね継手(D10~D16) *ガス圧接() ・機械式継手() *溶接継手()					備考 試験片及び試験方法は、次による。 引張及び曲げ試験 各5本 試験片はJIS Z 3881に示す削り仕様(I,1D) 試験体積(D 25) 材種(SD345)					
8.1.3 コンクリートの種類 8.1.4 コンクリートの品質 8.2.6 構造体用モルタルの調合 8.2.5 コンクリートの材料及び調合 8.8.3 コンクリートの強度試験の結果 8.6.1 一般事項					イ.アンドアンカーハーの径 * I 類 b.アンドアンカーハーの新設箇内への定着長さ ・頭部ナット付きの場合はアンカーハー径の20倍以上、頭部ナットなしの場合はアンカーハー径の30倍以上 ・設計図による					8.2.15 鉄筋の加工及び組立 a.継手の工法 部位等 継手工法と適用範囲 b.板厚及び定着長さ 柱主筋 *重ね継手() *ガス圧接() ・機械式継手() *溶接継手() 梁主筋 *重ね継手() *ガス圧接(D19~D25) ・機械式継手() *溶接継手() スラブ、壁筋 *重ね継手(D10~D16) *ガス圧接() ・機械式継手() *溶接継手()					試験片及び試験方法は、次による。 引張及び曲げ試験 各5本 試験片はJIS Z 3881に示す削り仕様(I,1D) 試験体積(D 25) 材種(SD345)										
8.1.3 コンクリートの種類 8.1.4 コンクリートの品質 8.2.6 構造体用モルタルの調合 8.2.5 コンクリートの材料及び調合 8.8.3 コンクリートの強度試験の結果 8.6.1 一般事項					c.重ね継手() *ガス圧接() ・機械式継手() *溶接継手() d.柱、梁の継手を同一箇所に設ける部位 *なし・あり(継手位置 *設計図による) e.鉄筋の継手位置 *設計図による c.主筋及び耐力筋の鉄筋の重ね継手長さ *設計図による ・40G(軽量コンクリートは50d)と改修標仕表8.3.3の値のうち大きい値					8.2.16 鉄筋の機械式継手及び溶接継手 a.レディミクストコンクリートの発注、製造及び運搬 b.回収水のうちラッジング水は、原則として使用しない。					備考 試験片及び試験方法は、次による。 引張及び曲げ試験 各5本 試験片はJIS Z 3881に示す削り仕様(I,1D) 試験体積(D 25) 材種(SD345)										
8.1.3 コンクリートの種類 8.1.4 コンクリートの品質 8.2.6 構造体用モルタルの調合 8.2.5 コンクリートの材料及び調合 8.8.3 コンクリートの強度試験の結果 8.6.1 一般事項					f.外観試験 1)目視による外観検査を全数実施するほか、次に示す詳細外観検査を行う。 イ)検査数は、抜き取り試験の1ロットあたり3箇所とする。 ロ)検査項目、検査方法及び合否判定基準は、日本鉄筋総合会「鉄筋のガス圧接工事標準仕様書(2009)」(4,5,6 外観検査)による。 ハ)詳細外観検査を行ったのち、ロット番号、部材番号、鉄筋径、各項目の測定値、検査数及び検査員等を結果一覧表に記録し、監理者へ提出するとともに、記録と検査部が統合できるようにする。					9.超音波探傷試験 1) *行う *行わない 2) ロット当たりの抜き取本数及び抜取率 *30箇所					備考 試験片及び試験方法は、次による。 引張及び曲げ試験 各5本 試験片はJIS Z 3881に示す削り仕様(I,1D) 試験体積(D 25) 材種(SD345)										
8.1.3 コンクリートの種類 8.1.4 コンクリートの品質 8.2.6 構造体用モルタルの調合 8.2.5 コンクリートの材料及び調合 8.8.3 コンクリートの強度試験の結果 8.6.1 一般事項					g.超音波探傷試験の検査部位 a.鉄筋の端面及び端面の直角切削機を用いて切断する。 b.鉄筋を切断したのち、圧接端面まで時間がある場合等で、監理者の承認のうえ、防錆上観端面から端面に圧接端面保護剤を塗布することができる。圧接端面保護剤は、日本鉄筋総合会による認定を受けた、ガス圧接部の性能に影響を及ぼさない塗料を用いる。					10.外観試験 a.鉄筋を切断したのち、圧接端面まで時間がある場合等で、監理者の承認のうえ、防錆上観端面から端面に圧接端面保護剤を塗布することができる。圧接端面保護剤は、日本鉄筋総合会による認定を受けた、ガス圧接部の性能に影響を及ぼさない塗料を用いる。					備考 試験片及び試験方法は、次による。 引張及び曲げ試験 各5本 試験片はJIS Z 3881に示す削り仕様(I,1D) 試験体積(D 25) 材種(SD345)										
8.1.3 コンクリートの種類 8.1.4 コンクリートの品質 8.2.6 構造体用モルタルの調合 8.2.5 コンクリートの材料及び調合 8.8.3 コンクリートの強度試験の結果 8.6.1 一般事項					h.超音波探傷試験の検査部位 a.鉄筋の端面及び端面の直角切削機を用いて切断する。 b.鉄筋を切断したのち、圧接端面まで時間がある場合等で、監理者の承認のうえ、防錆上観端面から端面に圧接端面保護剤を塗布することができる。圧接端面保護剤は、日本鉄筋総合会による認定を受けた、ガス圧接部の性能に影響を及ぼさない塗料を用いる。					11.外観試験 a.鉄筋の端面及び端面の直角切削機を用いて切断する。 b.鉄筋を切断したのち、圧接端面まで時間がある場合等で、監理者の承認のうえ、防錆上観端面から端面に圧接端面保護剤を塗布することができる。圧接端面保護剤は、日本鉄筋総合会による認定を受けた、ガス圧接部の性能に影響を及ぼさない塗料を用いる。															

J180774 921FP-01.DWG 19/02/04 <FNS>SNK0102
PS A1 07機造煙卷(1) 1/100 A1YC

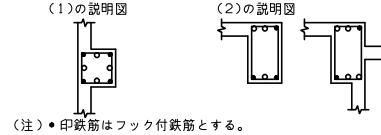
PS AI_U7構造標準(1) 1/100 AIYC

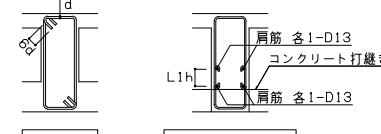
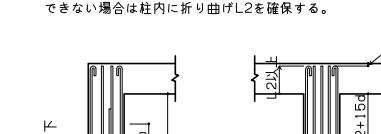
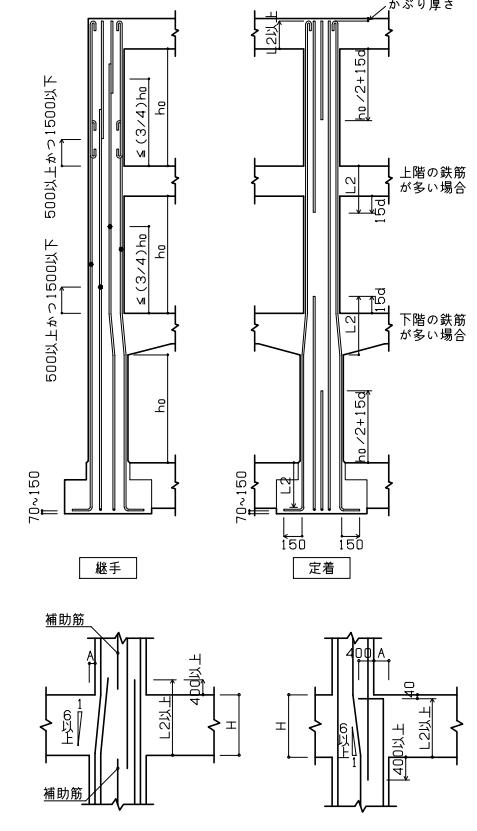
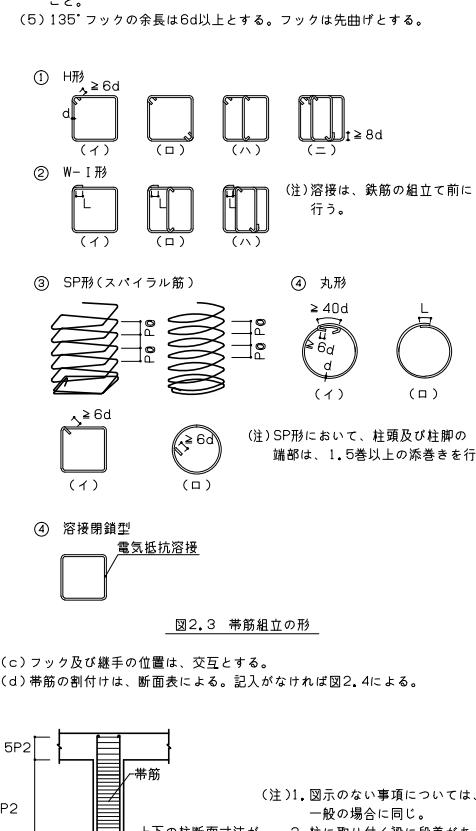
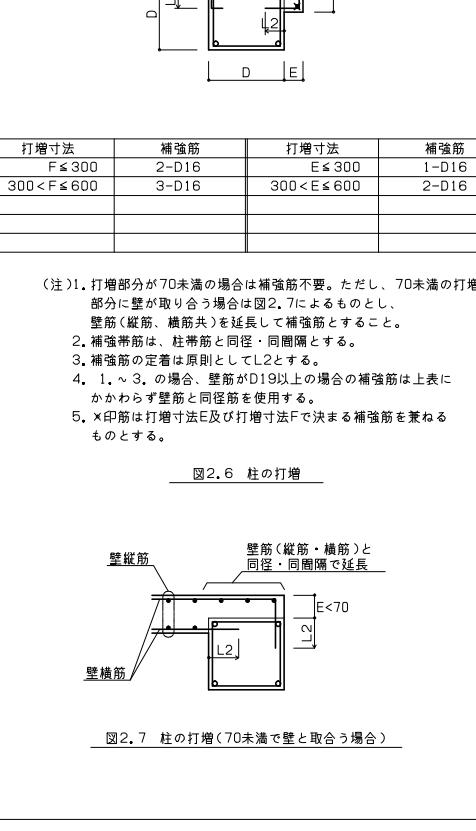
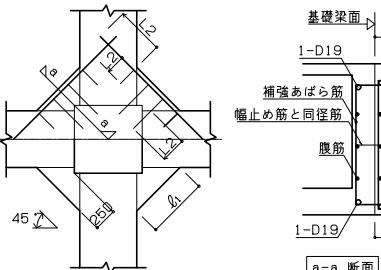
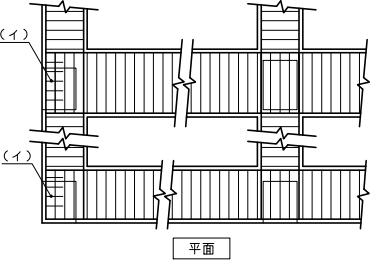
日建設計

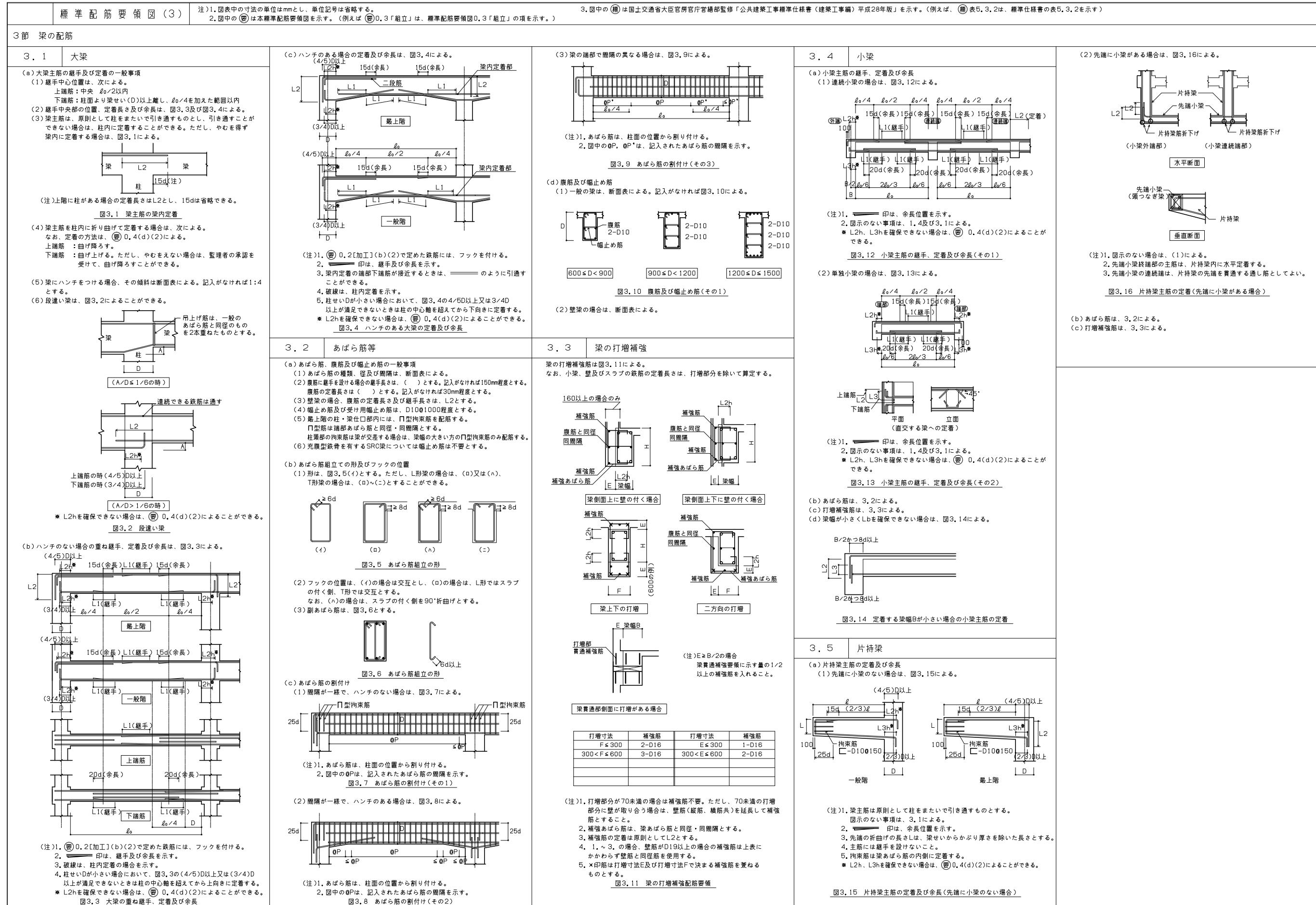
Table 1. Summary of results

山梨県立中央病院
精神・身体合併症病棟増築工事
伐木・軸組図 A1-1_59_1/100

(通し番号 2)
2 - 1

標準配筋要領図(1)		注)1. 図表中の寸法の単位はmmとし、単位記号は省略する。 2. 図中の(■)は本標準配筋要領図を示す。(例えば(■)0.3「組立」は、標準配筋要領図0.3「組立」の項を示す。)			
○節 鉄筋の加工および組立					
○. 1 一般事項					
(a) 鉄筋は、設計図書に指定された寸法及び形状に合わせ、常温で正しく加工して組み立てる。 (b) 有害な曲がり又は損傷等のある鉄筋は、使用しない。 (c) コイル状の鉄筋は、直線状態にしてから使用する。この際、鉄筋に損傷を与えない。 (d) 鉄筋には、点付け溶接を行わない。また、アースストライクを起こしてはならない。		・組立に関する注意事項 1)コンクリート打込み後の差し筋は行わない。 2)鉄筋の台直しは原則として行わない。やむを得ず台直しを行う場合は、鉄筋周囲のコンクリートをはつり取り、勾配が1/6以下のできるだけ長い距離で修正する。 ・溶接コンクリートの上に直接設置する仮設物には、防錆処理を施すと共に、当該仮設物の下には止水処理を施す。			
○. 2 加工		(a) 鉄筋の切断は、シャーカッター又はのこぎによって行う。 ただし、現場でやむを得ない場合は、ガス切断ことができる。 (b) 異形鉄筋の末端部には、次の場合にフックを付ける。(下図参照) (1)柱の頭にある主筋で、重ね継手の場合及び最上階の柱頭にある場合。 (2)梁主筋の重ね継手が、梁の出隅及び下端の両端にある場合。 ただし、基礎筋の壁となる場合を含む。) (3)構架の鉄筋(壁の一部となる場合を含む。) (4)杭基礎のベース筋。 (5)帯筋、あら筋及び幅止め筋。 (6)その他の本要領図に示す個所。 (1)の説明図 (2)の説明図  (注)・印筋はフック付鉄筋とする。 図0.1 異形鉄筋のフック位置			
(c) 鉄筋の折曲げ内法直径及びその使用個所は、表0.1による。 表0.1 鉄筋の折曲げ形状及び寸法 (■)表5.3.1)		(d) 鉄筋の定着は、次による。 (1) 鉄筋の定着の長さは、表0.5による。 表0.5 鉄筋の定着の長さ (■)表5.3.4)			
折曲げ角度		鉄筋の種類			
折曲げ図		コンクリートの設計基準強度 $F_c(N/mm^2)$			
SD295A, SD295B, SD345, SD390		L1			
D16以下		L2			
D19~D38		L3			
SD390		小梁			
D19~D38		スラブ			
180°		L1h			
		L2h			
4d以上		L3h			
SD295B		L1			
24, 27		L2			
35d		L3			
30, 33, 36		小梁			
30d		スラブ			
SD345		L1h			
18		L2h			
50d		L3h			
SD390		L1			
24, 27		L2			
45d		L3			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD490		L1h			
24, 27		L2h			
55d		L3h			
30, 33, 36		小梁			
50d		スラブ			
SD390		L1			
24, 27		L2			
40d		L3			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD390		L1h			
24, 27		L2h			
40d		L3h			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD390		L1			
24, 27		L2			
40d		L3			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD390		L1h			
24, 27		L2h			
40d		L3h			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD390		L1			
24, 27		L2			
40d		L3			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD390		L1h			
24, 27		L2h			
40d		L3h			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD390		L1			
24, 27		L2			
40d		L3			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD390		L1h			
24, 27		L2h			
40d		L3h			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD390		L1			
24, 27		L2			
40d		L3			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD390		L1h			
24, 27		L2h			
40d		L3h			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD390		L1			
24, 27		L2			
40d		L3			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD390		L1h			
24, 27		L2h			
40d		L3h			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD390		L1			
24, 27		L2			
40d		L3			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD390		L1h			
24, 27		L2h			
40d		L3h			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD390		L1			
24, 27		L2			
40d		L3			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD390		L1h			
24, 27		L2h			
40d		L3h			
30, 33, 36		小梁			
40d		スラブ			
SD390		L1			

標準配筋要領図(2)		注)1. 図表中の寸法の単位はmmとし、単位記号は省略する。 2. 図中の(図)は本標準配筋要領図を示す。(例えば(図)0.3「組立」は、標準配筋要領図0.3「組立」の項を示す。)				3. 図中の(図)は国土交通省大臣官房官庁官署部監修「公共建築工事標準仕様書(建築工事編)平成28年版」を示す。(例えば、(図)表5.3.2は、標準仕様書の表5.3.2を示す。)	
1節 杭・基礎及び基礎梁の配筋		3. 図中の(図)は国土交通省大臣官房官庁官署部監修「公共建築工事標準仕様書(建築工事編)平成28年版」を示す。(例えば、(図)表5.3.2は、標準仕様書の表5.3.2を示す。)				3. 図中の(図)は国土交通省大臣官房官庁官署部監修「公共建築工事標準仕様書(建築工事編)平成28年版」を示す。(例えば、(図)表5.3.2は、標準仕様書の表5.3.2を示す。)	
1. 5	基礎梁のあら筋等	2. 1	柱	2. 2	壁筋	2. 3	柱の打増強
(a) あら筋 (1) あら筋の径及び間隔は、断面表による。 (2) あら筋組立の形及びフックの位置は、3.2による。ただし、梁の上下端にスラブが付く場合で、かつ、梁せいが1.5m以上の場合は図1.13によることができる。	柱主筋の継手及び定着は次による。 (1) 継手及び柱接中心位置は、梁上端から500mm以上、1500mm以下、かつ(3/4)h0(h0は柱の内法高さ)以下とする。 (2) 重ね継手長さはL1として、定着及び余長は図2.1による。なお、柱頭定着長さはL2以上かつ柱頭かぶり厚さまでとする。柱頭定着長さL2が確保できない場合は柱内に折り曲げL2を確保する。	柱	柱	壁筋	壁筋	柱の打増強	柱の打増強筋は図2.6による。 なお、梁、壁及びスラブの鉄筋の定着長さは、打増部分を除いて算定する。
(一般の場合)   (重ね継手とする場合)  図1.13 あら筋組立の形及びフックの位置	 柱主筋の継手及び定着は次による。 (1) 継手及び柱接中心位置は、梁上端から500mm以上、1500mm以下、かつ(3/4)h0(h0は柱の内法高さ)以下とする。 (2) 重ね継手長さはL1として、定着及び余長は図2.1による。なお、柱頭定着長さはL2以上かつ柱頭かぶり厚さまでとする。柱頭定着長さL2が確保できない場合は柱内に折り曲げL2を確保する。	 柱主筋の継手及び定着は次による。 (1) 継手及び柱接中心位置は、梁上端から500mm以上、1500mm以下、かつ(3/4)h0(h0は柱の内法高さ)以下とする。 (2) 重ね継手長さはL1として、定着及び余長は図2.1による。なお、柱頭定着長さはL2以上かつ柱頭かぶり厚さまでとする。柱頭定着長さL2が確保できない場合は柱内に折り曲げL2を確保する。	 柱主筋の継手及び定着は次による。 (1) 継手及び柱接中心位置は、梁上端から500mm以上、1500mm以下、かつ(3/4)h0(h0は柱の内法高さ)以下とする。 (2) 重ね継手長さはL1として、定着及び余長は図2.1による。なお、柱頭定着長さはL2以上かつ柱頭かぶり厚さまでとする。柱頭定着長さL2が確保できない場合は柱内に折り曲げL2を確保する。	 柱主筋の継手及び定着は次による。 (1) 継手及び柱接中心位置は、梁上端から500mm以上、1500mm以下、かつ(3/4)h0(h0は柱の内法高さ)以下とする。 (2) 重ね継手長さはL1として、定着及び余長は図2.1による。なお、柱頭定着長さはL2以上かつ柱頭かぶり厚さまでとする。柱頭定着長さL2が確保できない場合は柱内に折り曲げL2を確保する。	 柱主筋の継手及び定着は次による。 (1) 継手及び柱接中心位置は、梁上端から500mm以上、1500mm以下、かつ(3/4)h0(h0は柱の内法高さ)以下とする。 (2) 重ね継手長さはL1として、定着及び余長は図2.1による。なお、柱頭定着長さはL2以上かつ柱頭かぶり厚さまでとする。柱頭定着長さL2が確保できない場合は柱内に折り曲げL2を確保する。	 柱主筋の継手及び定着は次による。 (1) 継手及び柱接中心位置は、梁上端から500mm以上、1500mm以下、かつ(3/4)h0(h0は柱の内法高さ)以下とする。 (2) 重ね継手長さはL1として、定着及び余長は図2.1による。なお、柱頭定着長さはL2以上かつ柱頭かぶり厚さまでとする。柱頭定着長さL2が確保できない場合は柱内に折り曲げL2を確保する。	 柱主筋の継手及び定着は次による。 (1) 継手及び柱接中心位置は、梁上端から500mm以上、1500mm以下、かつ(3/4)h0(h0は柱の内法高さ)以下とする。 (2) 重ね継手長さはL1として、定着及び余長は図2.1による。なお、柱頭定着長さはL2以上かつ柱頭かぶり厚さまでとする。柱頭定着長さL2が確保できない場合は柱内に折り曲げL2を確保する。
(b) 腹筋及び幅止め筋は、3.2(a)(2)から(4)及び3.2(d)による。 (c) あら筋の割付けは、3.2(c)による。							
1. 6 基礎梁の補強							
(a) 打増し補強筋は、3.3による。 (b) 土商スラブ等の打増し補強筋は、5.3(c)による。 (c) 基礎梁水平ハンチ部の補強要領は図1.14による。 場所打コンクリート杭がある場合は図1.4による。							
 (注)1. この項で扱う基礎梁の水平ハンチとは基礎梁断面表に特記がなく伏図のみに示される水平ハンチいう。 2. 水平ハンチ部の腹筋及び補強あら筋はX・Y方向基礎梁の規定鉄筋の大さい方と同様とする。 3. L1が200以下の場合は補強筋不要。 図1.14 基礎梁水平ハンチ部の補強要領							
(d) 柱幅が梁幅よりも小さい場合の補強要領は図1.15による。							
 (注)1. X, Y両方向の梁幅>柱幅に適用する。 2. 柱に定着する考え方とする。柱筋の定着は、2.1による。 3. あら筋は、X方向梁幅とY方向梁幅の大きい方を優先させる。 4. 梁内の柱帶筋は、不要。ただし、隅柱、側柱には補強筋(口)を帯筋と同様として、5倍間隔に入れる。柱幅内のあら筋間隔は、規定のあら筋間隔の1.5倍とする。 5. 補強筋(イ)は、同方向側梁あら筋と同様と同様とする。 図1.15 柱幅が梁幅よりも小さい場合の補強要領							
本標準配筋要領図に使用される記号	B リストに示す梁幅	L2 一般鉄筋の定着長さ	W 屋根・床スラブの開口(長辺方向)の大きさ	ℓ 鋼のスパン、片持ちスラブのスパン	長瀬 悟 林 秀行 一級建築士 一級建築士	日建設計	山梨県立中央病院 精神・身体合併症病棟増築工事
竣工	D リストに示す柱幅	L3 小量、スラブの下諸筋の定着長さ	d 鉄筋の呼び名に用いた数値	ℓ0 梁の内法スパン			
監理	E,F 柱梁の打増寸法	L1h フックあり継手及び定着長さ	h 隅高	ℓx,dy 長方形スラブの短辺有効スパン			
施工	H リストに示す梁せい	L2h,L3h フックあり定着長さ	ho 柱の内法高さ	t リストに示すスラブ又は壁厚さ			
J180774_921SDR-03.DWG 19/01/09 <FNS>SNK0102	P 壁開口(円孔)の大きさ	L1 一般鉄筋の継手及び特殊な場合の定着	P 壁開口(円孔)の大きさ				構 (通し番号 4) 3 - 2 No. J-180774-
PS A3_07構造標準(1) 1/1 A1YFP0							18.01.18 RC・PC研究会 作成



著工	竣工	監理	施工	本標準配筋要領図に使用される記号	長瀬 悟 林 秀行	一級建築士 一級建築士	山梨県立中央病院 精神・身体合併症病棟増築工事	構 (通し番号 5) 3 - 3
B	L2	L3	E,F	B リストに示す梁幅 D リストに示す柱幅 E,F 柱梁の打増寸法 H リストに示す梁せい L1 一般筋筋の継手及び特殊な場合の定着	L2 一般鉄筋の定着長さ L3 小梁、スラブの下端筋の定着長さ L1h フックあり継手及び定着長さ L2h,L3h フックあり定着長さ P 壁開口(円孔)の大きさ	W 屋根・床スラブの開口(長辺方向)の大きさ d 鉄筋の呼び名に用いた数値 h 隅高 ho 柱の内法高さ t リストに示すスラブ又は壁厚さ	l 梁のスパン、片持ちスラブのスパン l0 梁の内法スパン lx,ly 長方形スラブの短辺有効スパン	日建設計
								標準配筋要領図 (3)
								No. J-180774-

標準配筋要領図(4)

注)1. 図表中の寸法の単位はmmとし、単位記号は省略する。
2. 図中の(■)は本標準配筋要領図を示す。(例えば(■)0.3「組立」は、標準配筋要領図0.3「組立」の項を示す。)

4節 壁、その他の配筋

4. 1 壁

(a) 一般事項
 (1) 構造筋の重ね継手はL1、定着の長さはL2とする。
 (2) 番号の頭にEW記号のつく壁は耐震壁扱いとする。
 (3) 重ね継手及び定着の長さが取れない場合は、監理者と協議する。
 (4) 幅止め筋は、縦横ともD10 01000程度とする。
 (5) 一般部屋の配筋は、図4.1による。

(注)図中のOPは、壁断面表に記入された壁筋の間隔を示す。

図4.1 壁の配筋

(6) 壁筋の継手位置は図4.2の斜線部分の範囲とする。

(注)図中のOPは、壁断面表に記入された壁筋の間隔を示す。

図4.2 壁筋の継手位置

(7) 壁筋の定着要領は図4.3による。

(注)1. 梁及び柱主筋の外側に定着される場合は150折り込む。(※印)
 2. スラブの下側に壁が付く場合も適用する。
 3. 地下外壁は図4.6も参照のこと。

図4.3 壁筋の定着

4. 2 壁の補強

(a) 壁開口部の補強
 (1) 壁開口部の補強筋は壁断面表による。
 (2) 壁の開口部補強要領は図4.7及び図4.8による。

図4.4 壁の配筋要領

(c) 壁の交差部及び端部の配筋は図4.5による。

(注)1. 壁厚200以下の壁開口に適用する。
 2. 開口最大寸法が200以下の場合は補強筋不要。
 3. a寸法が100以下の場合は補強筋不要。
 4. 補強筋は壁断面表による。
 5. 補強筋は規定壁筋以外に入れる。
 6. 開口ピッチは、3×(隣接する開口寸法の平均)以上を原則とする。
 7. 開口高さが階高の0.4倍を超える場合、縦補強筋は梁内にL2定着する。

図4.5 壁の交差部及び端部の配筋要領

4. 7 壁の開口部補強要領(鉄筋格子の場合)

図4.7 壁の開口部補強要領(鉄筋格子の場合)

4. 8 壁の開口部補強要領(鉄筋の場合)

図4.8 壁の開口部補強要領(鉄筋の場合)

4. 9 壁の設備開口部補強要領

図4.9 壁の設備開口部補強要領

4. 10 壁欠込み部補強要領

(注)1. *が180未満かつ90以上の場合は、壁筋表と同径筋を1/2間隔にてシングル配筋とする。
 2. *が180以上の場合は、同径・同間隔でダブル配筋とする。
 3. 配筋が規定壁筋以外に入れる。
 4. 開口ピッチは、3×(隣接する開口寸法の平均)以上を原則とする。
 5. 開口高さが階高の0.4倍を超える場合、縦補強筋は梁内にL2定着する。

図4.10 壁欠込み部補強要領

4. 11 壁の打増補強要領

壁の打増補強配筋は、図4.11により、打増厚aが50以上、かつ、200以下の場合に適用する。200を超える場合は、記入による。

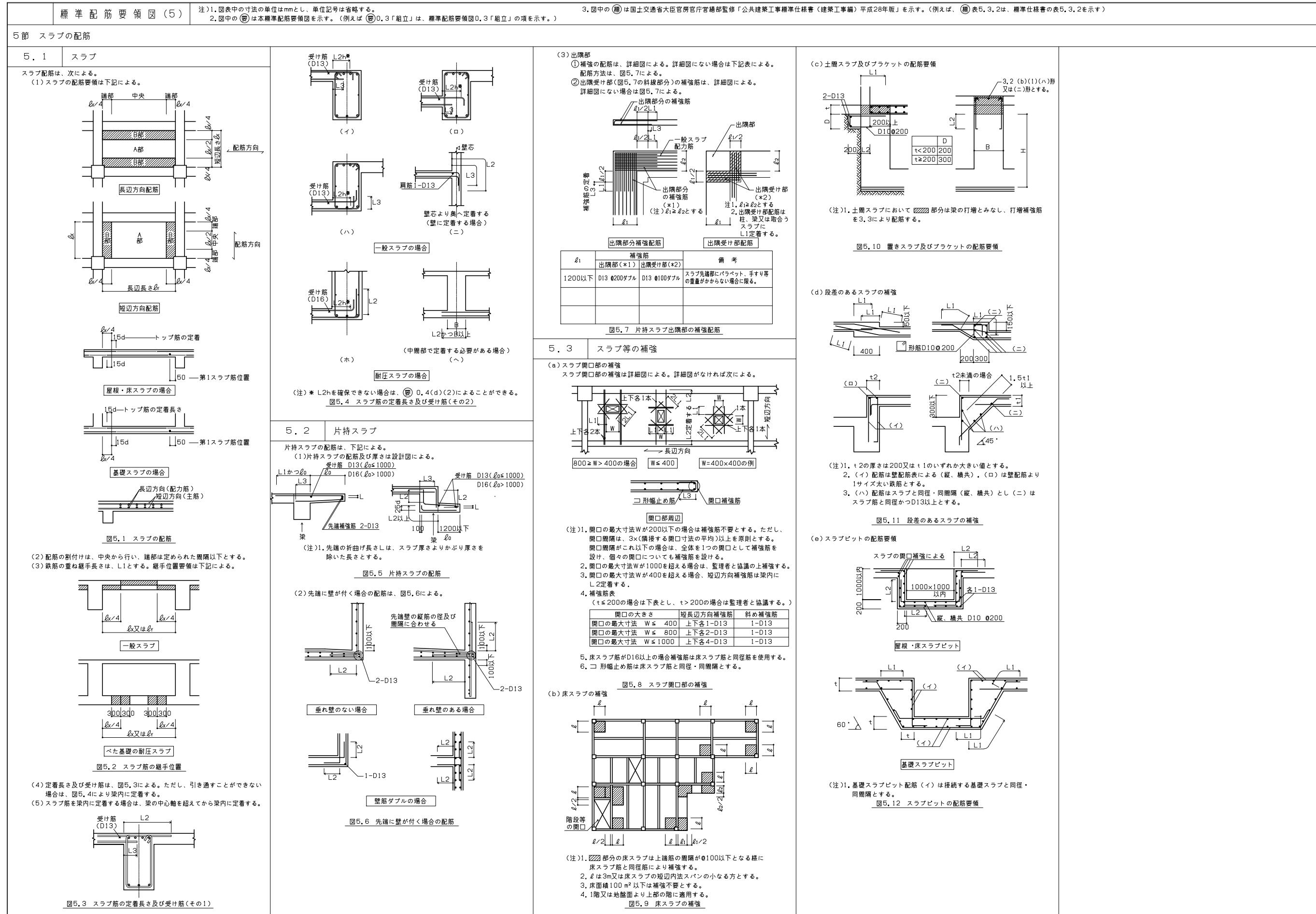
図4.11 壁の打増補強要領

4. 3 バラベット

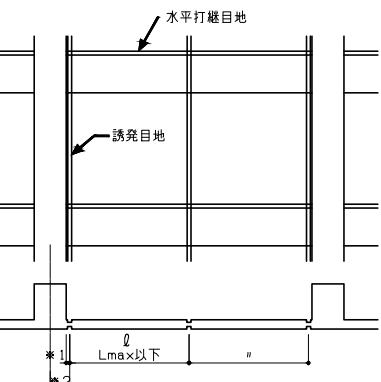
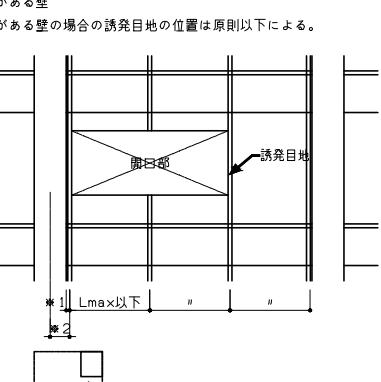
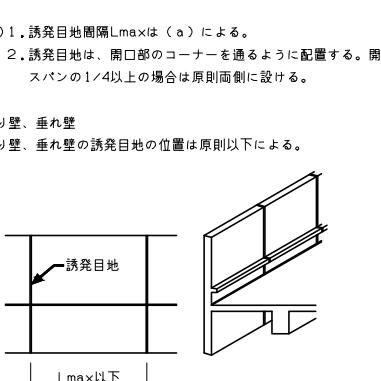
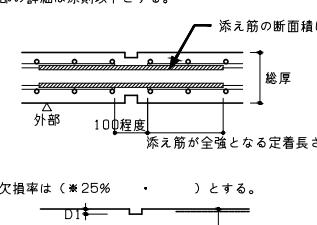
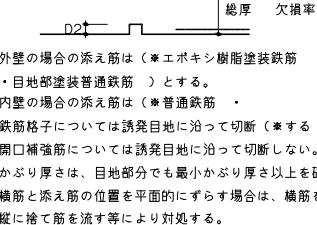
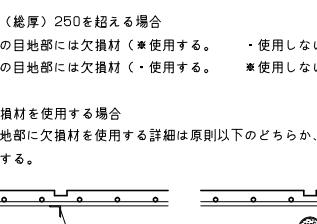
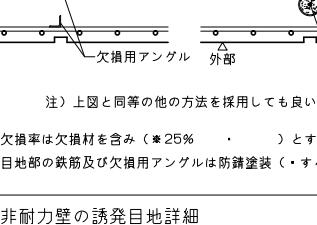
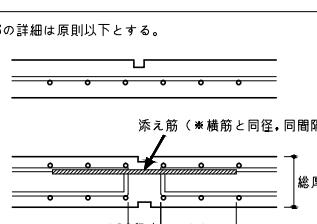
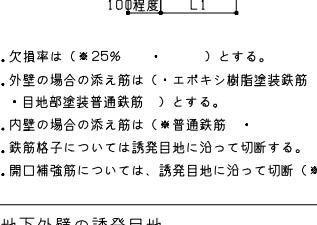
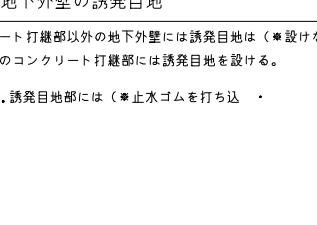
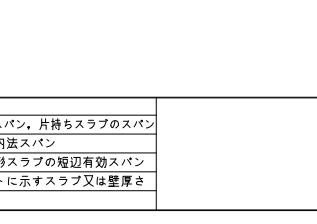
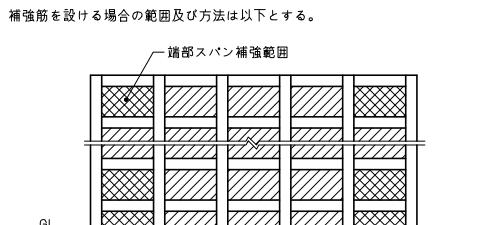
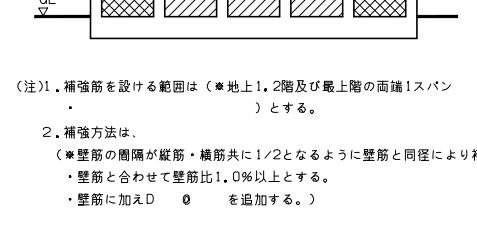
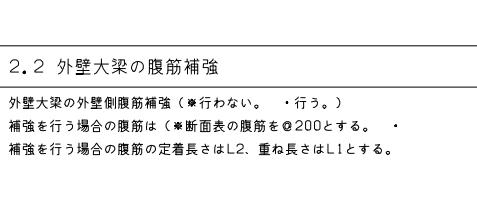
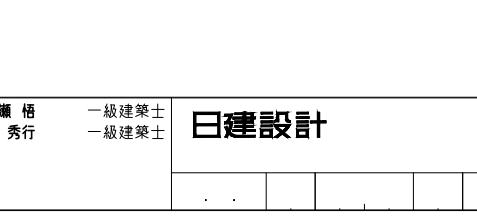
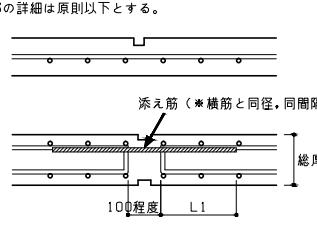
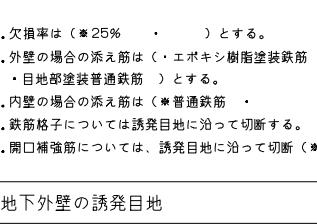
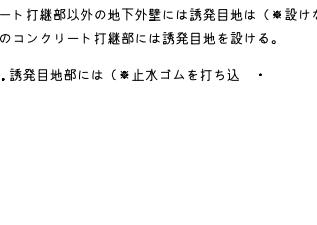
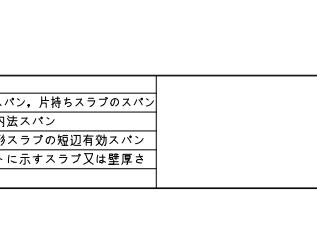
バラベットの配筋は図4.12による。

図4.12 バラベットの配筋

本標準配筋要領図に使用される記号										長瀬 悟 林 秀行	一級建築士 一級建築士	日建設設計	山梨県立中央病院 精神・身体合併症病棟増築工事	(通し番号 6) 構 3-4		
着工	竣工	監理	施工	B	L2	W	ℓ	h	d	ℓ₀	ℓ₀	ℓ₀	ℓ₀	h₀	t	長方形スラブの短辺有効スパン
				B: リストに示す梁幅	L2: 一般鉄筋の定着長さ	W: 屋根・床スラブの幅(長辺方向)の大きさ	ℓ: 梁のスパン、片持ちスラブのスパン	h: 階高	d: 鉄筋の呼び名に用いた数値	ℓ₀: 梁の内法スパン	ℓ₀: 梁の内法スパン	ℓ₀: 梁の内法スパン	ℓ₀: 梁の内法スパン	h₀: 柱の内法高さ	t: リストに示すスラブ又は壁厚さ	長方形スラブの短辺有効スパン
				D: リストに示す柱幅	L3: 小量、スラブの下諸筋の定着長さ											
				E,F: 柱筋の打増寸法	L1h: フックあり継手及び定着長さ											
				H: リストに示す梁せい	L2h,L3h: フックあり定着長さ											
				L1: 一般鉄筋の継手及び特殊な場合の定着	P: 壁開口(円孔)の大きさ											



本標準配筋要領図に使用される記号									
施工	竣工	監理	施工	B	L2	W	長瀬 恒	一級建築士	山梨県立中央病院
				リストに示す梁幅	一般鉄筋の定着長さ	屋根・床スラブの開口(長辺方向)の大きさ	林 秀行	一級建築士	精神・身体合併症病棟増築工事
				D	L3	梁のスパン、持ちスラブのスパン			
				E,F	小量、スラブの下諸筋の定着長さ	梁の内法スパン			
				H	L1h	柱の呼び名に用いた数値			
				L1	フックあり定着長さ	柱の内法高さ			
					L2,L3h	柱の内法高さ			
					P	柱の内法高さ			

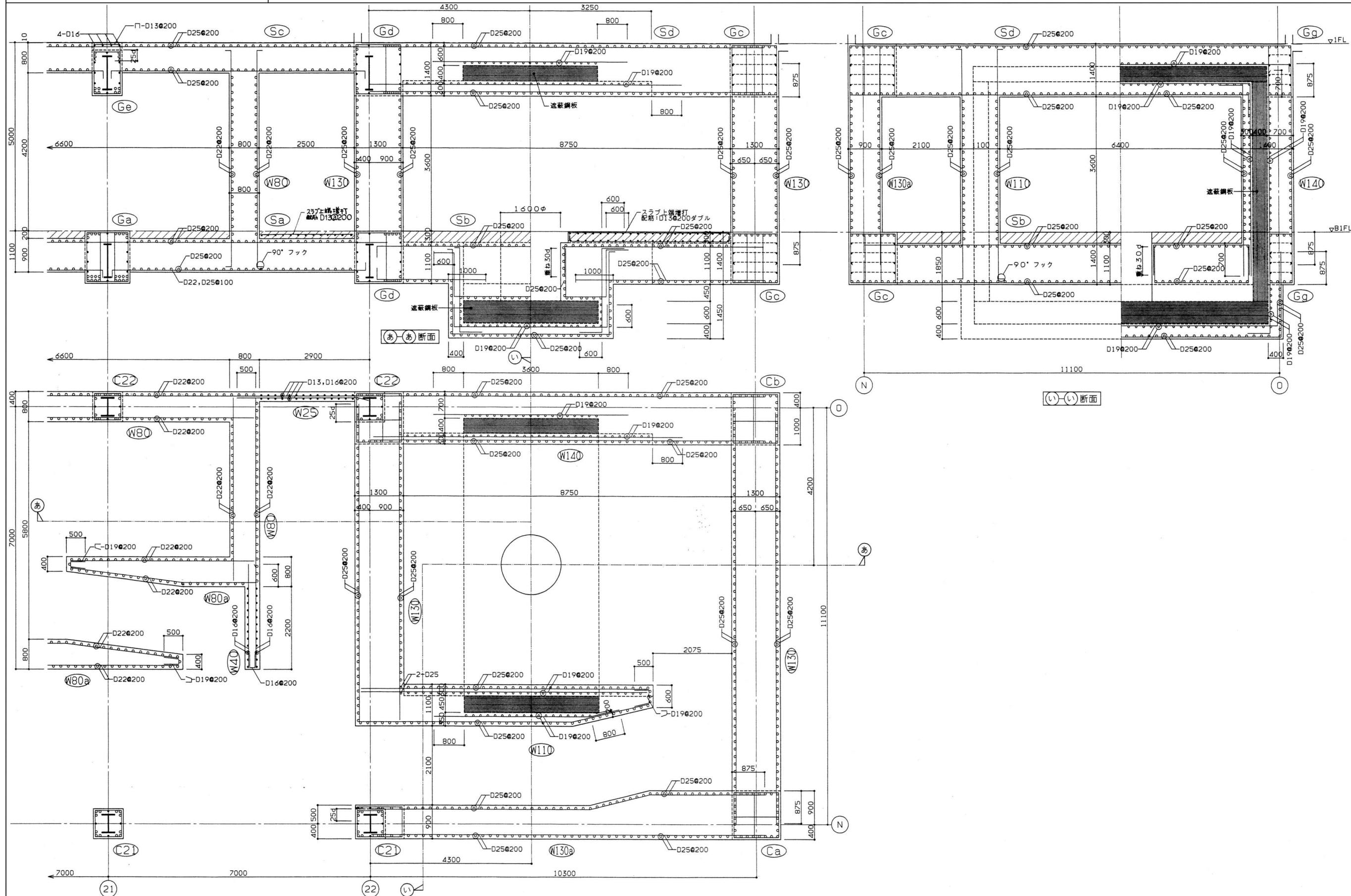
標準配筋要領図(6)	注)1. 図表中の寸法の単位はmmとし、単位記号は省略する。 2. 図中の(●)は本標準配筋要領図を示す。(例えば(●)0.3「組立」は、標準配筋要領図0.3「組立」の項を示す。)	3. 図中の(●)は国土交通省大臣官房官庁宮崎部監修「公共建築工事標準仕様書(建築工事編)平成28年版」を示す。(例えば、(●)表5.3.2は、標準仕様書の表5.3.2を示す。)		
7節 梁貫通孔その他の配筋	ひび割れ対策要領図	注)1. ●印の付いたものを適用する。この場合*印があってもそれは適用しない。ただし、●印のない場合*印の付いたものを適用する。		
7.1 梁貫通孔	1. 誘発目地	2. ひび割れ補強		
(a) 梁貫通孔は、次による。 (1) 梁貫通孔補強筋の名称等は、図7.1による。 (2) 孔の径及び間隔は、以下による。孔が円形でない場合はこれの外接円とする。 1. 貫通孔径は、 (RCの場合) 大梁φ D/5 小梁φ D/4 (SRCの場合) φ D/3かつ 鋼骨せい Hs/2 ただし、設計図に示されない個所については監理者の指示に従う。 2. 貫通孔の中心間隔は、 (RCの場合) 4x(隣接する貫通孔径の平均) かつ 500以上 (SRCの場合) 3x(隣接する貫通孔径の平均) かつ 500以上を原則とする。 (3) 孔の上下方向の位置の限度は、 (RCの場合) Ho ≥ 250 (SRCの場合) Ho ≥ 250 かつ H1, H2 ≥ 100を満たすこと。 (4) 孔の中心位置の限度は、柱及び直交する梁(小梁)の面から、原則として1.2D(Dは梁せい)以上離す。 (5) 縦筋及び上下縦筋は、あばら筋の形に配筋する。(Ø100) (6) 横補強筋は主筋の内側とする。やむを得ない場合は、監理者の承認を受けた外側にすることができる。また、鉄筋の定着長さは、図7.3による。 (7) 孔の径が100mm以下のものは、補強を省略することができる。	1.1 誘発目地位置 (a) 誘発目地位置の原則 壁の誘発目地の位置は原則以下による。   	1.2 耐震壁(EW)誘発目地詳細 (a) 壁厚(総厚)250以下の場合 目地部の詳細は原則以下とする。        	2.1 端部スパン補強筋 外壁に端部スパン補強筋(*設ける。・設けない。) 内壁に端部スパン補強筋(*設ける。・設けない。) 補強筋を設ける場合の範囲及び方法は以下とする。        	2.2 外壁大梁の腹筋補強 外壁大梁の外壁側腹筋補強(*行わない。・行う。) 補強を行う場合の腹筋は(*断面表の腹筋をØ200とする。・) 補強を行う場合の腹筋の定着長さはL2、重ね長さはL1とする。
(b) 横補強筋は前記7.1(a)の条件のもとで算定したものであり、現場施工に当たってはシャースパン比L/2dを考慮し、終局耐力計算書を作成のうえ監理者の承認を得ること。 (2) あばら筋がD16以上の時は、縦補強筋をあばら筋と同径とする。 (3) 施工用スリーブは鋼管(STK400)とする。 (4) RC用スリーブは硬質塗装管とする。 (5) 上記の他、貫通孔の水処理は設備工事施工管理要領による。 (6) 基礎用の繩ない貫通孔の補強筋は大梁用と同じとする。 (7) 土に接する梁の貫通孔スリーブはステンレス製(つば付)とする。 (8) 縦補強筋の一巻とは、梁断面表に示すあばら筋形状を一巻みなす。 (9) 既製の補強筋を用いる場合には、監理者の承認を得ること。ただし、孔径が200mmを超える場合は上縦筋および下縦筋を省略しないこと。	1.3 非耐力壁の誘発目地詳細 目地部の詳細は原則以下とする。    	1.4 地下外壁の誘発目地 コンクリート打継部以外の地下外壁には誘発目地は(*設けない。・設ける。) 地下外壁のコンクリート打継部には誘発目地を設ける。		

著工	竣工	監理	施工	本標準配筋要領図に使用される記号	長瀬 悟 林 秀行	一級建築士 一級建築士	日建設計	山梨県立中央病院 精神・身体合併症病棟増築工事	構 (通し番号 8) 3 - 6	標準配筋要領図(6)	No. J-180774-
B リストに示す梁幅	L2 一般鉄筋の定着長さ	D リストに示す柱幅	L3 小梁、スラブの下諸筋の定着長さ	W 屋根・床スラブの幅(長辺方向)の大きさ	l 長さ	l0 梁のスパン、片持ちスラブのスパン					
E,F 柱梁の打増寸法	L1h フックあり継手及び定着長さ	d 鉄筋の呼び名に用いた数値	h 隆高	l0 長さ	l0x2y 長方形スラブの短辺有効スパン						
H リストに示す梁せい	L2h,L3h フックあり定着長さ	ho 柱の内法高さ	t リストに示すスラブ又は壁厚さ								
L1 一般鉄筋の継手及び特殊な場合の定着	P 壁開口(円孔)の大きさ										

既存図(参考図)その1

A1 =

注記) 記入なき限り下記によ
1. 巾止め筋:D130600以



着工
竣工
監理			.	.
			.	.
施工			.	.

長瀬
林秀

長編
林秀

長編
林秀

建築士
建築士

山梨県立中央病院
精神・身体合併症病棟増築工事

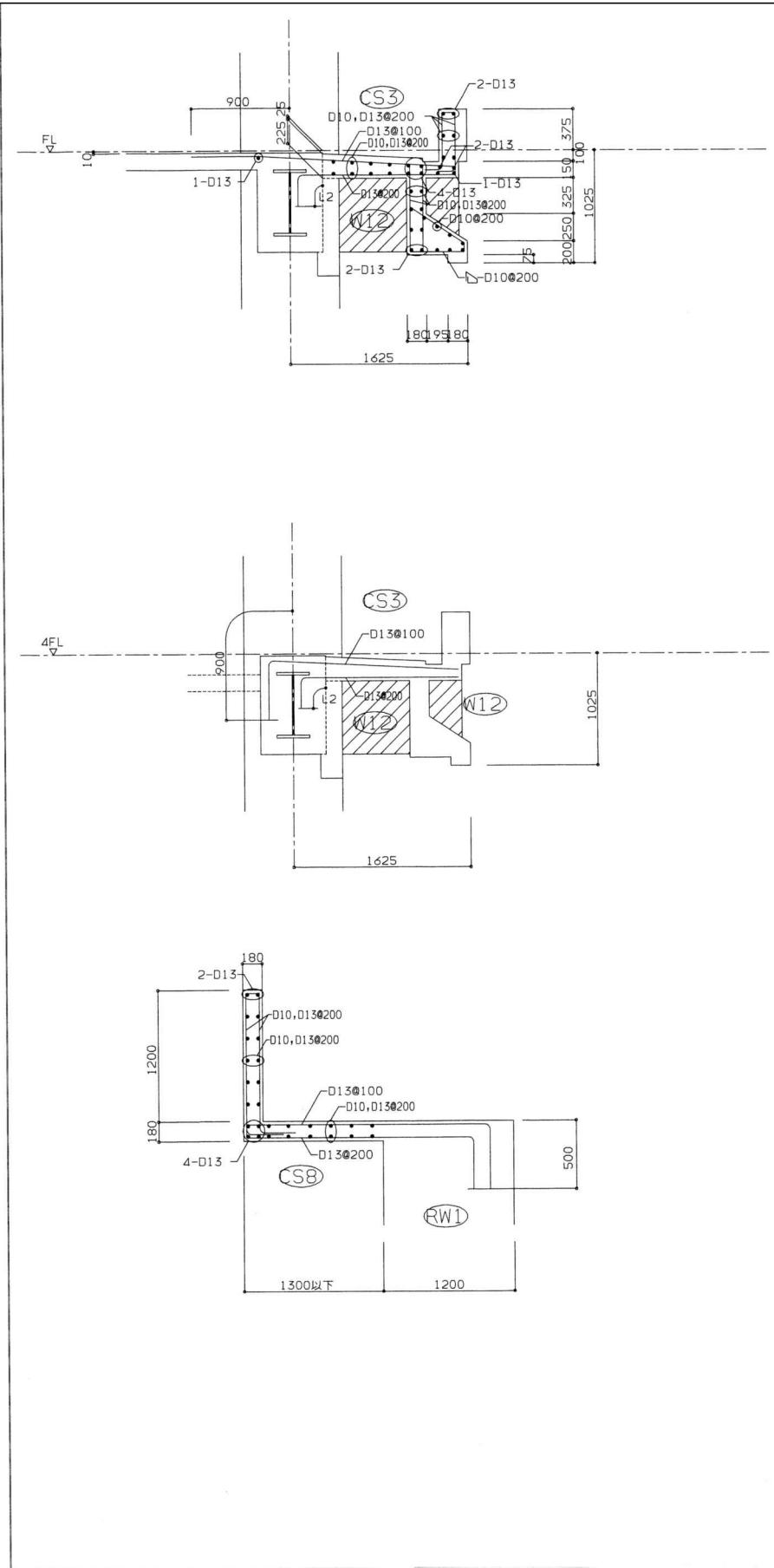
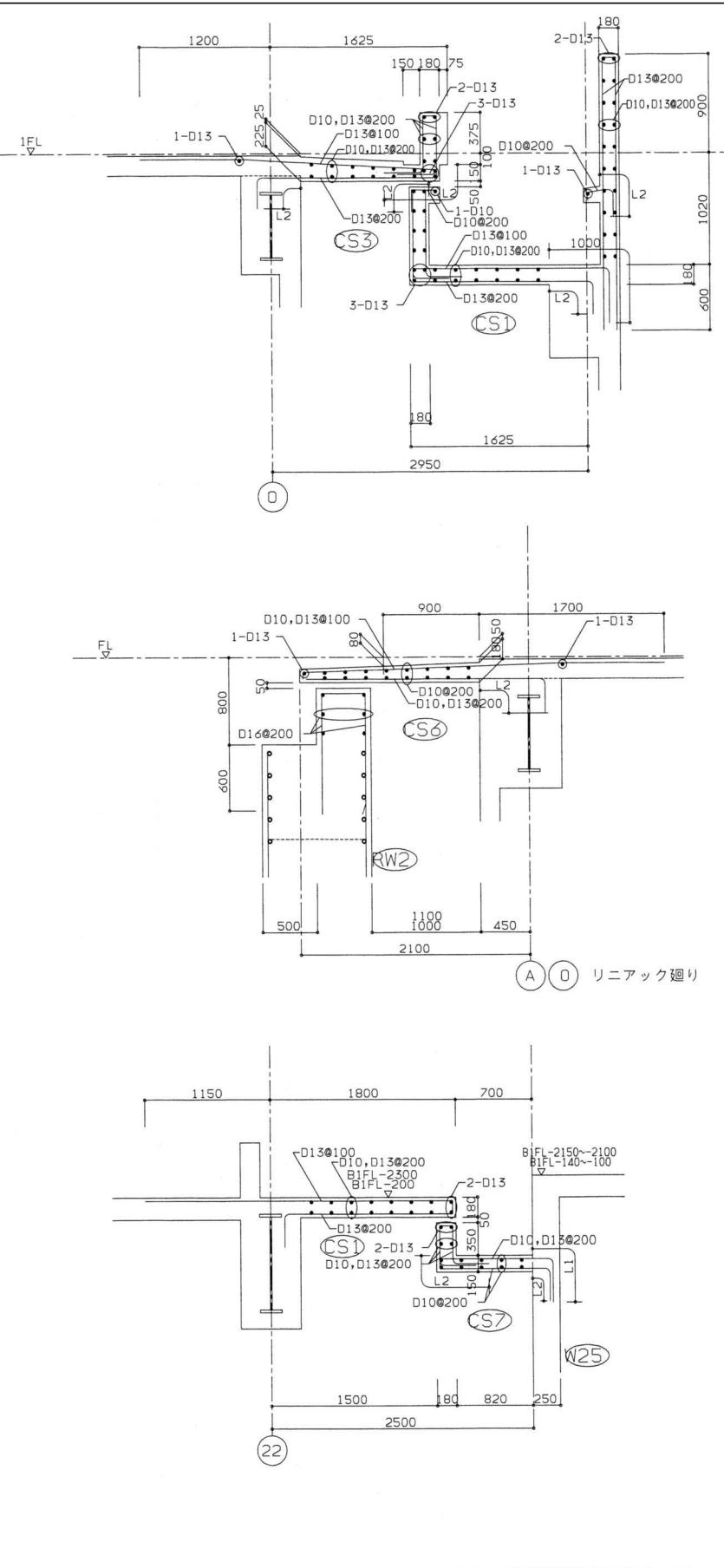
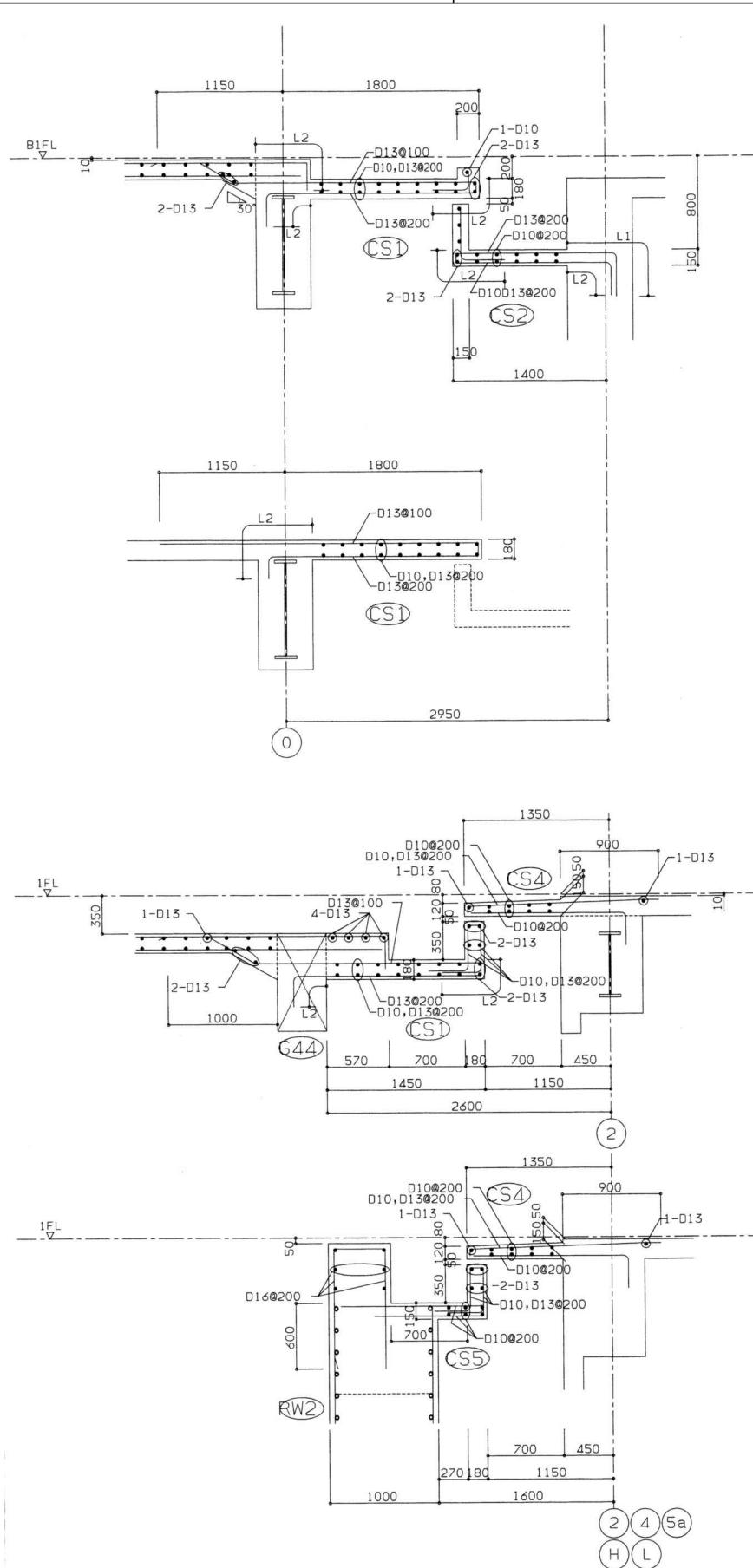
(通し番号 9)

J180774 921DR-01.DWG 19/01/22 <FNS>SNK0102
PS A1_07構造標準(1) 1/50 A1YC

既存図(参考図)その2

A1=1/30
A3=1/60

注記) 記入なき限り下記による



看工	
竣工	
監理	
施工	
J1807744 921DR-02.DWG 19/01/22 <FNS>SNK01C PS A1_1構造標準 (1) 1/30 A1YC			

長瀬
林秀

長瀬悟
林秀行

日建設

山梨県立中央病院
精神・身体合併症病棟増築工事

(通し番号 10)
構 4 - 2

既存図(参考図)その2 A1=1/30
A3=1/60

J-180774-